

東京の文化財



牧野記念庭園(練馬区)

目次

東京文化財ウィーク2022が始まります！	1～3
文化財を護る ー桐箱と真田紐ー	4～5
文化財を活かす(板橋区・東久留米市)	6～7
武蔵国分寺跡史跡指定100周年記念	8

東京文化財ウィーク2022が始まります！

東京都教育庁では、「文化の秋」にちなんで毎年10月、11月に、都内の文化財により親しんでいただくことを目的として「東京文化財ウィーク」を開催しています。

都内各地で集中的に文化イベントが開催されるほか、通常は公開していない貴重な文化財も多数公開されます。今年の秋は、東京の豊かな文化に接してみたいはいかがでしょうか。

期間限定！特別

各文化財の公開状況に関する詳細については、「東京文化財



【絹本着色虚空蔵菩薩像】（足立区）

密教の修法の一つである「虚空蔵菩薩求聞持法（こくうぞうぼさつぐもんじほう）」の本尊で、東京における弘法大師信仰の一端を示す作品として意義が高いものです。（11月1日のみ特別公開）



【宇津木向原遺跡方形周溝墓出土品】（八王子市）

中央自動車道建設時に行われた発掘調査で発見された出土品で、「方形周溝墓」という墓の命名のきっかけにもなりました。（11月3日～11月6日まで特別公開）



【旧磯野家住宅】（文京区）

実業家の磯野敬が建設した住宅で、主屋の屋根と外壁に銅板が張り巡らされている外観から「銅（あかがね）御殿」と呼ばれています。明治末から大正初期にかけての近代和風建築の粋を凝らした建物です。（10月29日のみ特別公開）



【猿曳駒絵馬】（あきる野市）

都内に残る最古の絵馬で、制作当初は絵馬として寄進され、後に豊蚕を願う人々に配るため版木に転用された珍しいものです。（10月29日～11月6日まで特別公開）※前日までに要予約

表紙の文化財

牧野記念庭園（練馬区）

「日本の植物分類学の父」といわれる牧野富太郎博士の居宅跡及び庭園です。庭園内には、博士が植えたり命名したゆかりの植物の数々を見ることができます。2022年は博士の生誕160年にあたり、博士を主人公のモデルとした連続テレビ小説の制作も発表されています（23年春放送予定）。

見学に当たってのお願い！

文化財は私たちの大切な宝物であり、後世に受け継いでいくべき財産です。文化財を見学するときはマナーを守ってご鑑賞ください。

撮影禁止の場所もありますので、現地の指示や、「東京文化財ウィーク2022」ホームページの各文化財紹介に記載の注意事項に従ってください。



公開の文化財

ウィーク 2022」ホームページをご確認ください。



【群書類従版木】（渋谷区）

国学者である塙保己一（はなわほきいち）が編纂した『群書類従』の版木です。20字×20行の様式は、現在の原稿用紙の起源になったと言われています。

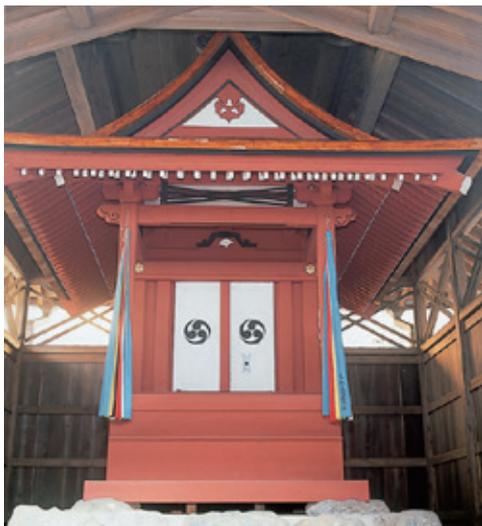
（10月29日～11月6日のみ特別公開）



【木造釈迦如来立像】（目黒区）

京都嵯峨の清凉寺に伝わる釈迦如来立像（国宝）を模して作られた像で、原像の趣を良く伝えています。制作年代もはっきりとした貴重な文化財です。

（10月29日～11月6日のみ特別公開）



【成木熊野神社本殿】（青梅市）

通常は保存のため覆屋で覆われていますが、期間中の土日に限り拝殿を開放し、拝殿から本殿を眺めることができます。

（10月29日～11月6日の土日のみ特別公開）



旧前田家本邸での催し

旧前田家本邸では、「東京文化財ウィーク 2022」の期間中、特別ガイドを実施しています。ぜひ、この機会に足を運んでみてください。



文化財を護る ≡≡≡ 桐箱と真田紐 ≡≡≡

古来、温度や湿度の変化に弱い美術品は、気密性に優れた桐箱に入れて保管されてきました。また、箱の蓋と身を結びつける紐には、強さと美しさを兼ね備えた真田紐が多く用いられています。

文化財を護るために欠かせない存在を生み出す、桐箱製作の大坂重雄さん、真田紐製作の市村藤一さん、宏さん親子の仕事を紹介します。



大坂さんが製作した桐箱のサンプル。漆塗りの外箱（左）に付けられた紐は市村さんの真田紐。白木の内箱（右）には掛け軸を固定する軸受けがついている。

桐箱のかたち

大坂さんの工房では、掛け軸などの美術品を保存するための桐箱を主に製作しています。白木の内箱と漆塗りの外箱による二重構造で、中に入れた美術品を湿気や乾燥から護ります。大坂さんの桐箱は、国宝や重要文化財といった特に貴重な作品の入れ物として用いられることも多く、その指物技術の確かさから、大坂さんは国の選定保存技術の保持者に認定されています。



製作に必要な材料を自作することも。写真はウツギの棒を削って作った木釘。

桐箱ができるまで

厳選した国産の桐材を、年月をかけて乾燥させ適度に水分を抜いてから用います。収納する美術品の寸法に合わせて切り出した後、接着剤や木釘を用いて箱の形に組み立てていきます。工程はシンプルながら、その作業は極めて精巧かつ繊細で、随所に熟練の技術が光ります。



国内各地から買い付けた桐材。良質の材を確保するのは年々難しくなっているそう。

文化財を護る匠の技

大坂さんの桐箱の最大の特徴は、何と言ってもその気密性の高さ。一見しただけでは境目がわからないほどで、蓋と身がまるで吸い付くかのようにぴったりと組み合わせられています。



大坂重雄さん。工房の壁にはたくさんの工具が並び、材料の状態や作業の段階などによって使い分ける。

そんな文字通り一分の隙も無い構造を生み出しているのが、大坂さんの、僅かな歪みも見逃さない鋭い眼と、寸分狂わぬ動きで板を削る繊細な手さばきです。削る面に当たる光の強さや角度にまで気を配りながら、際鉋と呼ばれる刃が斜めについた小さな鉋を当てて、少しずつ面を整えていきます。「合わない時は一日かけて合わせる。」(大坂さん)と語るほど、納得いく仕上がりになるまで幾度となく微調整を繰り返します。

そうして完成した桐箱は、外気の影響が箱の内部に与える影響を緩やかにし、大切な中身が傷むのを防ぎます。今この瞬間も日本各地で、貴重な文化財を人知れず護り続けています。



仕上がり具合がよくわかるよう、作業中は裸電球の明かりのみ。慎重に少しずつ面を整えていく。

「選定保存技術」とは

大切な文化財を保存し後世に伝えていくためには、文化財の修理技術や、それに用いられる材料・道具の製作技術が不可欠です。

そんな、文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術または技能のうち、保存の措置を講ずる必要があるものを「選定保存技術」として、その保護が図られています。



様々な色・文様の真田紐。どれも心地よく手に馴染み、見惚れてしまうような美しさ。

真田紐のつくり

「紐」と呼んでいますが、真田紐は経糸と緯糸とを組み合わせて織り上げていく織物です。絹や綿の糸をデザインに合わせた色に染め、糸枠から個々の管へと巻き取って織機にかけていきます。緯糸には綿糸を、経糸にはお客様の要望によって絹糸又は綿糸を使います。絹糸で織った紐は柔らかくしなやかで、綿糸で織った紐は程よい固さを持った仕上がりになります。市村さんの真田紐は、二重の袋状の構造を持った強靱な作りになっていて、桐箱の蓋と身をしっかりと結び付けることができます。

受け継がれる伝統の技



市村藤一さん。両親から受け継いだ織機を、自らメンテナンスして使い続けている。

真田紐を織る専用の自動織機は、藤一さんの両親が導入され、それを扱う技術とともに大切に受け継がれてきたもの。様々な注文に応じた製品を作り上げるためには、紐の幅や糸の材質に合わせた経糸の張力の調整など、各工程で熟練の技を必要とします。令和3年には、美術工芸品保存箱の紐としての真田紐製作が国の選定保存技術に選定され、藤一さんはその保持者に認定されました。今日も工房には織機の小気味よいリズムが響き、大切な文化を後世に伝えるべく、美しい真田紐が織り上げられています。

真田紐とは

美術品の保管にあたっては、箱の蓋と身を安定させるために紐がつけられるのが一般的です。耐久性・非伸縮性に優れ、かつデザイン性も高い真田紐は、格式高い美術品を保管する箱の紐として古くから用いられてきました。市村さんの工房には、日本各地の美術館や博物館などから注文が寄せられます。多くの顧客には専用の色や文様があり、ほとんどがオーダーメイド。希望のデザインに対応して作り上げていきます。



色とりどりの糸。最近では、人気キャラクターをモチーフにした紐の製作依頼もあり、以前はなかったような色を用いることも。



専用の木製自動織機。現在ではこの織機自体も貴重なもので、これを目当てに見学に来る人もいます。



藤一さんとともに製作を続ける宏さん。宏さんもこの道30年以上のベテラン。

文化財を活かす(板橋区)

旧粕谷家住宅の保存と活用

築300年を迎える旧粕谷家住宅の概要

旧粕谷家住宅は、板橋区徳丸にある江戸時代の古民家です。平成27年(2015)からの解体・復元工事により当初材である南東隅の柱の柄から「享保八年卯二月三日」の墨書銘が発見され、当住宅が享保8年(1723)に建築されたことがわかりました。令和5年(2023)2月3日には築300年を迎えます。施主は、徳丸脇村の名主を務めた粕谷五郎右衛門と考えられます。享保11年に、五郎右衛門は浅右衛門と名乗って粕谷家からこの家に移り隠居しました。以後、当家は幕末にかけて村の年寄り組頭役を務めるなど村内において有力農民層を形成していきました。

建物は、3本の大黒柱、三間四方のヒロマ、押板、シシ窓といった関東地方における江戸時代中期の古民家に見られる特徴の多くを備えています。化粧軒天井が施された初期の事例であるとともに、茅葺屋根の軒反りなどの社寺建築の技法も特徴の一つです。また、建築された享保年間から当初の場所に建っており、年代が明らかな民家としては都内最古級です。このように、旧粕谷家住宅は、関東の古民家としての地域的特色や江戸近郊の民家建築の発達過程を示す貴重な建造物です。

平成15年に「粕谷尹久子家住宅」として区の文化財に指定され、同19年に区への寄贈を受けて「旧粕谷家(東の隠居)住宅 付宅地」に名称が変更されました。その後、同30年に上記の理由から「旧粕谷家住宅」として都指定有形文化財となりました。



放水銃の試験放水の様子(令和4年1月)

保存事業

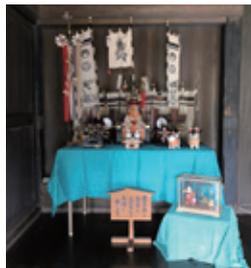
旧粕谷家住宅は、平成18年に一部寄贈を受けて以降、秋の東京文化財ウィークを中心に特別公開を行ってきました。その後、茅葺屋根や建造物の補修・改修・復元整備工事を経て、同29年に建築当初の姿に復元されました。

また、近年、文化財等への災害による惨事が発生し、防災対策への早急な取組が求められている中で、板橋区では、令和元年(2019)から同4年にかけて放水銃等の消防設備や管理棟の整備工事を行いました。整備費用は、都の補助とクラウドファンディングを活用し、区民の協力と理解のもと貴重な文化財の防火・防犯機能の向上を図り、次世代へ継承していきます。

活用事業

現在は、通年にわたる一般公開に加えて、区民寄贈の雛人形や五月人形の飾りつけ、七夕など季節に合わせた展示のほか、日本の伝統文化である室内の飾りつけを学ぶ「室礼教室」の実施、郷土芸能の披露を行っています。さらに、近隣小学校では、地域学習の一環として旧粕谷家住宅の見学を行うなど幅広い世代に向けた事業を展開しています。同時に、区立郷土資料館での企画展や講座を連携し企画しています。

このように、板橋区では、旧粕谷家住宅を地域の宝ものとして大切に保存しながら、地域の憩いの場、郷土芸能や伝統に触れる場として活用し、地域の魅力発信に取り組んでいます。



五月人形(昭和初期・寄贈)



室礼教室 室礼三千による七夕の展示



旧粕谷家住宅

所在地: 板橋区徳丸7-11-1

開場時間: 9:30~15:30(月曜休館)

連絡先: 板橋区教育委員会生涯学習課文化財係 ☎03-3579-2636

アクセス: 徒歩 都営三田線 高島平駅より約15分、

東武東上線 東武練馬駅より約20分

バス 国際興業バス「紅梅小学校」下車 徒歩3分(成増駅北口⇄赤羽駅)

東久留米市無形民俗文化財「南沢獅子舞」

五穀豊穡を願う「獅子舞」

東久留米市無形民俗文化財「南沢獅子舞」は、江戸時代初期から旧南沢村に伝わる伝統芸能です。

「へこの獅子は 伊勢が生まれで 江戸育ち～」と歌われ、大獅子、中獅子、牝獅子が舞い、多彩な芸が組み込まれています。五穀豊穡と悪疫退散を祈願して奉納され、作神・豊年獅子といわれていますが、明治から昭和初期には「雨乞い」のために獅子舞を行ったとの記録も残っています。

昔は、多聞寺、氷川神社、神明社、観音堂と3日間に渡る奉納舞が行われていましたが、明治から大正期に神明社と観音堂への奉納は廃止されました。

旧南沢村の長男のみに限り伝承され、稽古も定めた日程や、場所で行い、歌詞や口上の文句もすべて口伝で書いたものではありませんでした。昭和30年代に入り、後継者が少なくなってきたこともありいったん中断しますが、昭和41年町制施行10周年を機に復活、現在は南沢在住の「南沢獅子舞連」によって4年ごとの秋祭り（10月中旬）に演じられます。

当日は、午後に南沢氷川神社、夜に多聞寺で行われます。また、前日の夜には多聞寺で「揃い」と呼ばれる全体練習も行われます。



本番前の稽古

4年に1度演じられる南沢獅子舞ですが、練習は毎年行われています。それぞれの役は、役ごとの頭が中心となり後継者を育成していきます。

『世流布』『万歳』多彩な芸能

腹に太鼓をつけた3頭の獅子が、笛や歌に合わせて勇壮に舞う「一人立三匹獅子舞」の形式で、牝獅子2頭が牝獅子1頭をめぐる掛け合いが基本となっています。各地に伝わる獅子舞には多くの場合、さまざまな芸能が伴っていますが、南沢獅子舞も例外ではありません。迫力のある「太刀（棒つかい）」、歌舞伎の口上を述べる「世流布」、おかめ・ひょっとこがユーモラスに踊る「神楽」、二人で掛け合いをする「万歳」といった諸芸能が

付随しています。興味深いのは「世流布」と「万歳（大峯万歳）」です。「世流布」は江戸歌舞伎市川團十郎家に伝わる歌舞伎十八番のひとつ「暫」の真似事芸で、形を付けながら悪人退治の口上を述べます。「万歳」は多聞寺のみに奉納され、曲目は修験道の大峯入りを題材にした「大峯万歳」で、現存する江戸時代からの数少ない伝承例です。

獅子舞と万歳があわせて行われるのは全国でも数例しかなく、このことが南沢獅子舞の大きな特徴の一つとなっています。



世流布



万歳（太夫と才蔵）

前回の南沢獅子舞は平成29年に行われ、4年後の令和3年に行われる予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で開催が中止されました。江戸時代から連綿と続く芸能を守り次世代へ継承してするために、また、いつでも開催できるように練習は欠かさずに行っています。

東久留米市無形民俗文化財「南沢獅子舞」について

連絡先：東久留米市教育委員会教育部生涯学習課（郷土資料室）
☎ 042-472-0051 FAX042-472-0057

武蔵国分寺跡史跡指定 100 周年記念

令和4年度は、武蔵国分寺跡が大正11年(1922)に国の史跡指定を受けてから、100周年を迎える記念すべき年です。今からおよそ1,300年前の奈良時代中頃、天然痘の大流行、飢饉、大地震、政治権力をめぐる混乱などによって、社会不安が続いていた中、時の聖武天皇は、仏教の力によって国の混乱を鎮め、国民に幸福をもたらすために国分寺建立の詔を發布しました。この命令によって全国に国分寺(僧寺:金光明四天王護国寺と尼寺:法華滅罪之寺がセット)が造営され、現在の東京都、埼玉県、神奈川県、横浜市、川崎市域のほぼ全域が含まれる武蔵国では、今の国分寺市域が好所として選ばれました。武蔵国分寺の寺域・建物は、諸国国分寺の中でも最大級を誇り、武蔵国の宗教・文化の中心を担っていました。

市名の由来でもあり、多くの方に親しまれてきた武蔵国分寺跡の歴史的意義を改めて認識するため、様々な記念事業や体験イベント等を実施します。



特別展 史跡武蔵国分寺跡100年のあゆみ

武蔵国分寺跡が大正11年10月12日に史蹟名勝天然記念物保存法により国の史跡に指定されてから、今日に至るまでの100年のあゆみを、史跡の保護・調査・活用をテーマに紹介する展示を行います。



金堂跡

また、武蔵国分寺跡と同時期に指定された陸奥(宮城県仙台市)、常陸(茨城県石岡市)、甲斐(山梨県笛吹市)、三河(愛知県豊川市)、伊勢(三重県鈴鹿市)、備中(岡山県総社市)、土佐(高知県南国市)、筑前(福岡県太宰府市)の国分寺跡もパネル等で紹介します。

会場:武蔵国分寺跡資料館

期間:令和4年7月30日(土)～令和5年2月12日(日)

武蔵国分寺跡史跡指定100周年記念講演会

天平の時代から受け継がれてきた武蔵国分寺の歴史と文化、そして史跡指定の意義と価値を多くの方に知っていただくための記念講演会とシンポジウムを開催します。



武蔵国分寺跡(大正11年)

会場:市立いずみホール(JR西国分寺駅 徒歩2分)

日時:令和4年10月22日(土)午前10時～午後4時30分

第1部 講演会

記念講演「武蔵国分寺跡によせる心」

坂詰秀一先生(立正大学特別栄誉教授)

第2部 シンポジウム

基調講演「国分寺の伽藍と武蔵国分寺」

須田 勉先生(元国士舘大学教授)

事例報告 武蔵国分寺・下野国分寺・相模国分寺・上総国分寺

※申込み方法等については、国分寺市HP等でお知らせします。

おたかの道湧水園無料公開



日本多家住宅長屋門

史跡指定日を記念して、10月12日(水)から11月6日(日)まで史跡に立地する市立歴史公園おたかの道湧水園を無料公開します。国分寺崖線の豊かな自然が残り、貴重な自然・歴史的環境を形成している園内には、武蔵国分寺跡の出土資料や市内の主な文化財を展示している武蔵国分寺跡資料館、江戸時代に国分寺村の名主を務めていた本多家の長屋門があり、合わせて見学いただけます。東京文化財ウィークの開催期間にもなっていますので、文化財とともに、園内の湧水由来の池や植物もこの機会にぜひご覧ください。

おたかの道湧水園・武蔵国分寺跡資料館

所在地:〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10

アクセス:JR中央線・武蔵野線「西国分寺駅」下車徒歩約15分
JR中央線・西武多摩湖線・国分寺線「国分寺駅」
下車徒歩約20分

開館時間:午前9時～午後5時(入園は午後4時45分まで)

休園日:月曜日(但し月曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月29日～1月3日)、臨時休館日

入園料:おたかの道湧水園への入園料が必要
(※無料公開日を除く)

大人…100円、中学生以下…無料

連絡先:☎ 042-323-4103 Fax 042-300-0091

※武蔵国分寺跡史跡指定100周年記念事業・イベントの詳細については、国分寺市ホームページをご覧ください。

令和4年9月30日

発行 東京都教育庁地域教育支援部管理課

〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話 03(5320)6862

8

東京都教育委員会印刷物登録 令和4年度第33号

